

仏教とは何か

苦の発見

「リトル・ブッダ」という映画を観た。そこに描かれたシッダルタは「何不自由なく暮らす王子」であった。彼はある日、自由自在・慈愛深い人々で満たされた城壁を出る。城壁外は、生老病死、苦役と貧困と争いの場であった。呻きながら死んでいく人たち。

彼は、苦難を客体化するそして「彼らを助けたい」と思う。そして従者に聞く。「私も彼らのように苦しみながら死ぬのか」「そうだ」。その姿は私たちと重なる。いや、少なくとも満ち足りた日本の人々に当てはまるのではないかと思う。物



私達の祈りはこの子らに応えられるだろうか

においても満ち足り、人間愛においてもだいたい満ち足りた、そんなふりをする一見平和な私たち。しかし、

一步その外へと目を向けるや、苦難に満ちている。外とは、自分の愚昧な姿であろうし、実に苦しむ貧困と暴力下の人々であることは疑いない。

映画の設定には難がある。というのはその時代は戦国時代であり、将来皆殺しされる釈迦族の王子であった、温室育ちであろうはずはない。寧ろアンベードガル氏や、俊行師匠が言うように、将来は武器を持って部族の先頭に立ち、敵を打ち倒す運命こそが、シッダルタの立場と考えるのが妥当である。

しかしながら、武器を持って戦う運命のシッダルタにしても、平和を享受するシッダルタにしても、また同様の私たちにしても、城壁の内に留まるかぎり無明は解かれない。「人間の苦難」「人間の痛み(師

した言葉である。「若者よ、いつまでも下働きしてはいつか捨てられる。その前に管理職に食い入らな」と。

世界のリアリティー

それは、悲痛な喘ぎを伴う巨大な天へと立ち昇る層気楼のような生存競争のピラミッドであった。

金銭と衣食住と快楽に曳かれていく奴隷たちが、底辺に被支配と過酷労働と暴力の痛みに耐えながら、その労働と痛みを土台にし肥料にしながら上へ上へと踏み台にし踏みつけ駆け上がるとする巨大な生の営みである。これぞ進化の実体か。

しかしながら、裕福な者は困窮者を理解する訳ではない。同情はするがそれまでである。城壁の内なる存在者である。苦難は見ても見えない限りは見ないのである。苦はどこまでも、視覚では捉えられない内面的なものとしてある。私とて、それを見ているわけではない。時々見ようとして

「一刻も早く上へと上らなければ自分がやられてしまう。」「そういえば、このセリフは、いつか自分が発

匠の言(」を救うべき客体としない限りは、城壁内存在であり、衆生の分際である。

映画によれば、シッダルタは平和を享受していたが故に、平和ならざることを明確に捉えた。その境目こそが発心と呼ばれる運命的瞬間なのだろう。

苦の体験

では、「私」は、そのシッダルタが捉えた「人間の苦痛」をどのようにして捉えることができるのか。それは、

「苦悩世界を見聞する他はない」。世間の憂悲苦惱・喜怒哀楽を嘗め尽くしつつ自分の内部に質的变化が起こらなければ、発心はない。仏道への入門は叶わない。

では、どのようにして世間の苦は見聞できるのか。「暫く自分が苦難と思う状況へと足を運ぶしかない」。

私自身は、学生時代のスラム入りや、原爆体験証言や沖縄戦証言や、災害復興支援・自殺遺族証言、そしてそれらを通しての戦争や貧困の想像によって何らかの手応えの途上にある。しかしその手応えは、



イラク戦争と子どもたち

シッダルタはまさに隣国と一戦を構えるその時代に居た。小国のシャカは身内を嫁がせたり、大国と通じたりしながら、何とか戦争を遅らせただろうか。しかしいざれマガダ国に統一される運命。

その日が来た。武器を手にしたシッダルタは畏れた。「これが、私の目指していた『彼らを救う』ということなのだろうか。これでは逆ではないか。人を殺そうとする。その指導者が俺なのか」と。

以下、スタタニパータをそのまま引用したい。

武器を執ること(中村元訳88p) 殺そうと争闘する人々を見よ。武器を執って打とうとしたことから恐怖が生じたのである。わたくしがぞつとしてそれを厭い離れたその衝撃を宣べよう。

水の少ないところにいる魚のように、人々が慄えているのを見て、また人々が相互に抗争しているのを見て、わたくしに恐怖が起った。

世界はどこでも堅実ではない。どの方角でもすべて動揺している。わたくしは自分のよるべき住所を求めたのであるが、すでに(死や苦し

「(自分を含む)彼らを救いたい」というものの萌芽であって、確定ではない。

進化の実体

この春、再度スマトラ沖地震被災地タイ南部を見聞した。六十数年前「日本軍」が進軍した地であり、植民地の名残の在る地である。以前よりその地にはスラムを形成するビルマ人労働者が居るということをシャンティの秦さんより聞いていた。はたして、二度目の訪問で、ついに「そこ」へと辿り着く。

「もはや、方策尽きて援助もこれまでか」と継続を断念しかけた時だった。初回同行した女性の「どうしてもこの子を救いたい」という情報にも導かれ、また、現地のボランティアに案内されて、また、やさしい保母さんの案内を受けて、私たちはつ

などに(とりつかれていないところを見つけた。人々を殺そうとする。その指導者が俺なのか」と。

(生きとし生けるものは)終極においては違逆に会うのを見て、わたくしは不快になった。またわたくしはその(生けるものどもの)心の中に見がたき煩悩の矢が潜んでいるのを見た。

この(煩悩の)矢に貫かれた者は、あらゆる方角を駆けめぐらる。この矢を抜いたならば、(あちこちを)駆けめぐらることもなく、沈むこともない。

そこで次に実践のしかたが順次に述べられる。世間における諸々の束縛の絆にほだされてはならない。諸々の欲望を究めつくして、自己の安らぎを学べ。



タイ南部救援での夢

スマトラ震災救援のタイ南部での活動中、米国人宣教師、ウォルターさんに出会った。彼は、村ごと流された少数民族モーケンの村で、月の半分を生活しながら大工を探し、村人と共に十七隻の舟を造っていた。彼は仏教徒の私を後継者にしたかったのか、私にボートの造り方、エンジンの選び方を説いた。そして、



ウォルターさん

「ひと(他者)が困難に在る状況に於いて大事なものは、舟が無い家が無いという問題ではない。この状況に人間が何を思い考え何をを行うのか。人間の生き方が問題なのだ。それは、正直(honesty)ということだ。いかにこの局面において正直に向き合えるかということである」と。

この時、彼はまさに宣教師であった。私にとって師としてであった。

舟が問題ではない。人間が問題なのだ。問われているのはあなた自身だ。ブッダならどうだろう。

教理がどうだの世界がどうだの死後がどうだのが問題ではない。欲望に溺れて涅槃に気づくことなくいる私達が問題なのだ。

ブッダの蔭

確かにスッタニパータの仏教は、私達を煩惱から解き放ち、闘争と苦痛と汚濁から解放する。しかしながら、それだけでは、私達は生きていく推進力を失う。私達を引き回す欲望である「矢」を抜けば何を推進力とするのか。

松本史朗さんは、スッタニパータは「アトマン論」だと断定する。私も一種「ブラフマニズム」の感を持つ。欲望を離れ、生存の存続を絶ち、消え去るか、永遠のアトマン即ブラフマンにならねば居所を失うのである。(それは、道教の無にも似ている。)



4月1日子供達の笑顔が美しい



文具を配り学校を建てよう



奨学金は役に立つだろうか



寄贈前の平和と笑顔丸

リプッタが「修行者はいかにあるべきか」と問うとブッダは答える。「盗みなく、虚言なく、強き者にも弱きものにも友情の心を持つべし」と(Sng17)。もしも最古層といわれる第四章に拘らなければ、「賢明な同行者を得たなら、心喜び共に歩め(Sng18)」。また、第一章第八「慈しみ」には、「母が子を想う様に一切有情に無量の慈しみの心を持って」とあるし、Sng33以降在家者のつとめを説く中で、「生き物を殺してはならぬ」また、「正しい方法で財を得て、正しい商売のみ(武器、人身生き物の売買を許さない)を行い父母を養え」と説く。(但し私見としては、Sの第四章とその他では内容に違いがあり成立年代の差異があると思う)

弘法大師の宣言

ブッダのすそ野は、広く幸福論で満ちているのであって、人生の否定で覆われているのではないと考えたい。

いう目途はどのように仏教に記されるのか問題ではなからうか。

俊行師匠は、「理趣経百字の偈に救われた」と言い残した。「原始仏教では私達は寝て居るといつのかな」と聞いたのを覚える。「原始の仏教は、清浄の道を説いた。清浄とは憂悲苦惱を生み出さない道のことじゃろう。お大師さんは、生きる道を説いておられる」。

無自性なるが故に善が選択されると言われ、万灯会願文に「虚空尽衆生尽 涅槃尽 我願尽」との意味は、私達がこの世で今ただちに仏となつて涅槃を獲得するの意味であり、それはこの苦の大地が、そのまま楽土となることを意味している。

ブッダの時代は、戦闘の王国から逃れ、それとは別にサンガ楽土をつくる方法しかなかった。弘法大師の時代は、王を弟子とし盗賊国家を福祉国家・平和国家へと導き、サンガの境内を国土へと拡張得た時代ではなからうか。

ら罪を重ねながらそれぞれ幸福へと向かって努力しているのが実体ではなからうか。そこへ二者択一を持ち込む思考方法に問題がある。

神仏は、その救う対象を限定するのかしないのか。

普通に考えれば、神仏は無差別に救いの手を差し伸べるだろう。しかしながら、帰依しないものを排除する可能性はある。その点、信仰や帰依や忠誠心に関わらず、一切衆生に仏心ありとする仏教は大丈夫だと普通思うだろうが如何だろう。

先日、維新の志士の某氏についてある人と話した。平和で協力しようと言いなからその人の話になった。どうも彼女と私とはその志士に対する評価が違う。

次第に彼女は真剣になり語気が高まる。私の方もどうも気合が入り過ぎて、気がつく二人の意気投合は過去のものへと色褪せ、逆に敵意さえ伴う真剣さだけが残っていた。

握手をする時は問答無用

が良い。細論をあだこつだと言いだめると、意見の違いだけが目につき、論争が口論になり対立と対抗が勝つて来る。

そんな時、私はブッダの言葉を思い出した。Mg11:1-3839。

マータンガが言った。

「あなたは、諸々の勝者が求めた女や宝を求めないのであれば、どのような戒律、道徳、生活法を、またどのような生存状態に生まれることを説くのか」と。

それに答えて、釈尊は「私はこのように説く」ということがない(837)。「教義や学問や知識や戒律や道徳によつて清らかなる」とは説かない(839)」と言った。

マーガンティアが釈尊に對して「真理を限定しない教えなどはかけている」と釈尊を問いたですと、釈尊は、「あなたは、見解に頼つて尋ねるから、あなた(の考えや欲望)に捕らわれるがままに迷妄に落ちるのです。あなたは私が得ているこの平安の想いを観る(窺い知る)ことがない」と。

他所において、釈尊は見

解には必ず高慢が伴われるという。「あなたの方が優れている」。劣っている。『同じである』という想い』によつて迷う。また、名称には必ず好みと嫌いと、貴賤、上下、善し悪しが伴う。また、所有には支配欲が伴う。

「どうでも良いことはどうでも良いこと。分らないことは分らないこと。それより、自分がどうして苦しいのか、どうすれば苦がなくなるのか。それが問題だろう。そして、その苦をなくす縁起が分かっているれば尚更だろう。それよりもだれか思いつきりつらい人がいたらいつしよに解決しようよ」。

ブッダの眼には、善人も悪人もなく、どうすれば彼らが幸福を得られるかが覚りであった。だからこそ不殺生戒を守りたい。人を殺すなかれ、人を殺さしめるなかれ、ひとの痛みを分か

時は、武力略奪主義・国家主義の時代を累々たる屍の果てに超えて、国家間協調の時代へと進みつつある。あらゆる人種民族を超えて命を平等に慈しむ宗教の普遍性は名実共に必要とされる。即ち、不殺生等の戒律は国家的に、国際的に適用される時代を迎え、サンガが国際的に境界を放たれ、出家在家を超えて営まれる時代が来ている。しかし、その時仏教の独自性とは。

百字の偈に曰く

「蓮の根つこは泥の中に汚染としてあるが、蓮は、汚染に染まることなく、美しい花を咲かせる。その様に諸慾も根つこは憂悲苦惱であるが、憂悲苦惱を引き出すことなく、諸々の有情を利用するならば、それはブツダを見習って、仏の大慾となり清浄となつて大安樂を確かなものにする」

大意このようではなからうか。先日の愛媛仏教徒平和の会では、この泥中の蓮花が話題となった。大方の結論は、汚泥を資糧として覚りが開くであった。その意味は、

我と他者の憂悲苦惱を分かることによつて、覚りは開かれる。

俊行師匠は言い残した。

「ひとの痛みの分かる人になりなさい」と